

I 研究・調査活動 —研究推進センター—

[概要]

共同研究に関しては、6か年のプロジェクトである「人間文化研究機構基幹研究プロジェクト」(5課題)、「人間文化研究機構共創先導プロジェクト」(1課題)、3か年のプロジェクトである「基幹研究」(2課題5ブランチ)及び「基盤研究」7課題(新規1課題、継続6課題)、単年度のプロジェクトである共同利用型共同研究6課題を推進した。

人間文化研究機構基幹研究プロジェクトは、人間文化の新たな価値体系の創出に向けて、国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携して現代的諸課題の解明を目指すプロジェクトであり、その研究のスタイルにより「機関拠点型」、「広領域連携型」及び「ネットワーク型」の3つのタイプがある。いずれも2022年度より開始した。歴博では「機関拠点型」として「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」、「広領域連携型」として「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」、「同位体による年代・古気候・交流史研究」、「延喜式のデジタル技術による汎用化」、「ネットワーク型」として「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」を実施している。また同機構共創先導プロジェクトは機構内各機関及び国内外の大学等研究機関が連携して、研究資源や研究成果の共有化及び地域との共創・協働等を通して社会に貢献するプロジェクトであり、やはり2022年度より開始しているが、本館では共創促進研究として「外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用」を推進している。

なおこれに加えて、大学共同利用研究教育アライアンス(IU-REAL)のもとに、大学共同利用機関法人4機構間の連携により新たな分野の連携や創出を見いだすことを期待し、法人の枠を越えた異なる研究分野の研究者の自由な発想による研究を推進するIU=REAL異分野融合・新分野創出プログラム共同研究「概念の多様性を包含するナレッジグラフによる分野横断型知識構築および活用に関する研究」が開始され(2023~2025年度)、本館も参画している。

本館の基幹研究は、「環境や交流からみた日本歴史の動的研究」(2022年度~)と「生と死をめぐる歴史と文化」(2023年度~)の2課題を推進した。前者は「交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化、アイヌ文化—その成立・展開過程—」等3ブランチを継続し、後者は「高齢多死社会における生前から死後の移行に関する統合的研究」「死者への行為が形成する認識と社会変容」の2ブランチを今年度より新たに開始した。

基盤研究は課題設定型・館蔵資料型・歴博研究映像の3つの型よりなる。

課題設定型は、「秦漢時代の文字使用をめぐる学際的研究」(東京学芸大学・下田誠)「映像による民俗誌の叙述に関する総合的検討—制作とアーカイブスの実践的方法論の検討—」(京都産業大学・村上忠喜)「近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究」(明治学院大学・田中祐介)「中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究」の4課題である(いずれも継続課題)。

館蔵資料型は、「高度情報化による古代中世の寺院および荘園の総合的研究—額田寺伽藍並条里図と栄山寺寺領文書を中心に—」(早稲田大学・下村周太郎)(継続課題)に加え、「小渡遺跡を中心とする十腰内文化の研究」(千葉大学・阿部昭典)を新たに開始した。歴博研究映像は「歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築—沖縄地域の映像を中心に」(多摩美術大学・春日聡)の1課題である(継続課題)。また、若手研究者育成への取り組みとして、単年度で行う共同利用型共同研究(館蔵資料利用型、分析機器・設備利用型)の公募を行い、今年度は6件を採択した。本プロジェクトの成果が研究論文や学会発表に活かされていくことを期待したい。

以上の他、「機関拠点型」の人間文化研究機構基幹研究プロジェクトでは、メタ資料学研究センターを中心に、全国の大学・研究機関等と連携しつつ共同研究を推進している。今年度も、奨励研究の外部公募(2件)を行った。各共同研究の成果は、『国立歴史民俗博物館研究報告』(特集号)として継続的に刊行されているが、本年度は、241号から248号までの8冊(うち、248号は通常号)を製作した。

なお研究・調査活動の原資である運営費交付金が削減されていく状況のなかで、外部資金を導入しつつ研究の活性化を進めることは本館が取り組むべき課題であり、科研費申請にあたっての支援経費の助成等の取組みを継続した。

海外の大学等研究機関との国際交流事業は、国際企画室のもと、その強化を推進しているが、本年度は、学術交流協定に基づき、7件の国際交流事業を実施した。国立台湾歴史博物館にて2024年2月1日より「跨ぐ・1624:世界の島台湾」を開催するなど、研究成果の発信にも力を注いでいる。

また共創促進研究「外交と日本コレクション」では、長崎歴史文化博物館にてシーボルト来日200年記念国際シンポジウム「シーボルト研究の100年」を開催して(2023年10月15日)研究成果発信を進め、メタ資料学研究センターでは、インドネシアのバンドン工科大学と本館にて国際ワークショップを実施した(2023年10月26~27日)。この他、ダラム大学、ナショナルトラストスコットランド、スコットランド国立博物館、グラスゴー博物館機構、ケンブリッジ大学、セインズベリー日本藝術研究所(以上、英国)、大韓文化財研究院、国立中央博物館、釜山大学校、慶北大学校、韓国国立民俗博物館(以上、韓国)、ルーヴェン・カトリック大学(ベルギー)、ポーフム・ルール大学(ドイツ)、エトヴェシュ・ロラーンド大学(ハンガリー)、国立台北大学、国立成功大学(以上、台湾)等との連携協力による共同調査、共同研究、教育事業を推進している。今年度は新たに、韓国国立農業博物館(韓国)と学術交流協定を結んだ。

この他に、外国人招へい研究者3名(韓国1名、レバノン1名、イギリス1名)を受け入れ、共同研究や総合展示等の調査・研究活動を推進するとともに、協定機関との人的ネットワーク構築や共同研究のシーズ発掘を継続した。

研究推進センター長 小倉 慈司